

新作万葉集・第五話

山部赤人の富士山の歌

山部赤人の記録は続日本紀にはありません。官人として官位が低かったからか、貴族の使人であつたからかもしれません。続日本紀に記録されるようになるのは、原則として従五位下に叙位されてからで、名門貴族で二十歳半ばです。山部赤人は姓氏からして名門とは言えませんが、官人としても若くなくても続日本紀に記録されなかったことも想定できます。万葉集においては、聖武天皇即位年の神亀元年から天平八年頃まで十三年間に活躍した歌人です。

万葉集からは、名門中の名門出身の藤原宇合に仕えていた人物と想定することは可能なので、山部赤人は天平九年の天然痘の大流行によって亡くなったのかもしれませんが。藤原宇合自身も亡くなっています。

天平八年の歌（巻六・一〇〇五―一〇〇六）が最後の歌になっていることからそう推定することは可能です。

山部赤人は、第一番目の勅撰集である古今和歌集の仮名序で柿本人麻呂が歌聖と呼ばれたのに対して、優劣付けがたいと称されて、歌人として最高の評価を得ています。古今集では山辺赤人と記されていますが、万葉集では山部と称されていますので、本著では以降、山部赤人と記述します。

笠金村の場合には、同門の笠麻呂（出家して満誓）との関係で大伴旅人と大伴坂上郎女と交流があつたことは確かです。では山部赤人の五十首の歌はどうして万葉集に収録されたのでしょうか。

大伴家の関係を想定せざるをえないのですが、そのことは裏付けられるのでしょうか。

この時期、大伴家で倭歌において中心的人物は大伴坂上郎女です。

それでは大伴坂上郎女が山部赤人の歌を引用したのででしょうか。

その他に考えられるのは、藤原宇合―藤原良継（宇合の第二子）―大伴家持の関係から、大伴家持が入手したと考えることです。

山部赤人の歌は総計五十首が万葉集に収録されていますが、長歌が十三首と多いことと、自作の歌だけで、歌集からの引用歌はないことが特徴です。

山部赤人は歌集を作っていなかったのでしょうか。同時期、活躍した笠金村は歌集を作っています。

万葉集編纂者は山部赤人歌集を入手し、ほとんどの歌を万葉集に収録し、歌集の認識がなくなつたと考えることは可能です。

本章では山部赤人の超有名な「不尽山（富士山）の歌」を考察してみます。

山部赤人の名前が明確で、最初期の歌であるからでもあるのですが、この歌の背景には、ある事件が関わっていると考えられるからです。

まずこの歌の万葉集における配列を眺めると作者名が明瞭な歌の中で、大伴旅人が初めて作つた歌の直後に収録されています。

この大伴旅人の歌は、聖武天皇が即位されて改元された神亀元年三月の聖武天皇の初めての

行幸であつた吉野宮行幸の時の歌と考えられています。吉野宮行幸の一ヶ月前に大伴旅人は従三位から正三位に叙位され、封戸を増加されたばかりでした。

この大伴旅人の歌には作歌時期を示す記録は、題詞に「暮春の月・・・」とあるだけで時期を特定することはできませんが、先の吉野宮行幸と考えられています。このことは後ほど考察します。

中納言・正三位の大伴旅人が勅によつて作つた初めての歌(結果的にはこの歌は奏上されませんでした)の次に配置されたということは、大伴旅人との接点を考えたいとなります。事実、当時、大伴旅人は筆頭中納言(大納言は空位)でしたので、これから進める事件の推移はすべて把握していたことは間違いありません。

従つて、大伴旅人は山部赤人の「不尽山の歌」を誰よりも早く知りうる立場にいたこととなります。

まず山部赤人の「不尽山の歌」(巻三・三一七と三一八)を掲げます。

やまへのすくねあかひと ふじやま のぞ
山部宿禰赤人の不尽山を望める歌一首并せて短歌

▼天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く 貴き 駿河なる 布土の高嶺を 天の原 振り放け見れ

ば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降

りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

反歌

▼田児の浦ゆ うち出でて見れば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける

長歌の導入部は定型化しているので、その訳を割愛すると、「富士山を仰ぐと、空を渡る太陽も頂に隠れ、月の明かりも見えず、白雲も山にかかつて行き止まり、絶えず雪は降つたらしい、語り継ぎ、言い継いでいこう。富士の高嶺を」の意です。

時期を推定できるような表現はありませんが、「時じくそ」という句から季節を推定できそうです。「時じくそ」は「絶えず、間なく」の意ですから、「雪が絶えず降る」季節といえば冬です。晩秋になれば冠雪をいただき、山頂付近で雪が降り始めます。

冠雪を見て雪が降ったことが分かるのであって、山頂に雪が降っていることは観察できないことは現在でも明らかです。この歌の描写は初冠雪の時のまだ爽やかさの残る季節ではなく、どんより淀んだ雲から推定して、晩秋或いは冬と推定します。

従つて寒さを覚え、雪が降ったと実感しているようです。

次の反歌は、「ゆ」が「から」の意から、「田児の浦」を出港してまもなく詠まれたと想定されます。「ける」は過去あるいは「詠嘆」を意味する「けり」の連体形です。従つて、「雪は

降っていたのだな」と解釈できます。つまり、目的地に向かう時には、見ても気に留めていなかったのに、目的を果たし、安堵感が湧き、振り返ってみて、山頂に積もった雪を被った富士山を眺めて感激した様子がうかがえます。

第一の「不尽山の歌（一）」が詠まれたのは陸奥国への往路か帰路かという問は、「反乱が鎮圧され、帰還中の気分的に安堵した気持ちで「不尽山」を仰ぎ見る余裕が出てきている」と直感して帰路と判断しています。

これだけではこの歌の時代的背景は不明です。そこで万葉集を面として考えて、他の歌と関連させて考えました。

第二の「不尽山の歌」の収録の背景

万葉集ではこの山部赤人の「不尽山の歌」の直後に、同じような作者不詳の「不尽山」の歌が続きます。原歌では両歌とも「不盡山」と記されています。

山部赤人の「不尽山の歌」の直後の、題詞に「不尽山を詠める歌一首併せて短歌」と記された歌の作者は、笠金村あるいは山部赤人説があります。

しかし両歌人であれば、なぜ、名前を記さなかったかという新たな疑問が生じます。

第一の山部赤人の「不尽山の歌（一）」と比較するために、第二の「不尽山の歌（二）」（巻三・三一九、三二〇、三二一）を掲げ、作者不詳の「不尽の歌（三）」が挿入された背景を考察します。

まず、「不尽の山（三）」の歌を掲げます。

不尽山を詠める歌一首併せて短歌

▼なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる

不尽の高嶺は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もち消

ち 降る雪を 火もち消ちつつ 言ひもえず 名づけも知らず 霊しくも います神かも

石花の海と 名づけてあるも その山の つつめる海そ 不尽河と 人の渡るも その山

の水の激ちそ 日の本の 大和の国の 鎮とも 座す神かも 宝とも 生れる山かも 駿河

なる 不尽の高嶺は 見れど飽かぬかも

反歌

▼不尽の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ゆればその夜降りけり

不尽の嶺を高みかしこ恐み天雲もい行きはばかりたなびくものを

右の一首は、高橋連虫麿たかはしのむらじむしまろの歌の中に出づ。類たぐひを以ちてここに載す。の

この第二の長歌には二首の反歌が副えられていますが、その反歌の二つ目の歌に続くように左注が記され、そこに「右の一首は、高橋連虫麿の歌の中に出づ」と記されています。従って反歌の第二首目の歌は高橋虫麻呂の作と考えられています。

第一と第二の「不尽山の歌（一）」と「不尽山の歌（二）」には決定的な差があります。第一の長歌の「不尽山の歌（一）」の描写は、現実的で、山部赤人の心情が読み取れるほどであるのに対して、第二の長歌の「不尽山の歌（二）」は不尽山への讃歌あるいは地理学的であるということです。その第二の長歌の反歌の左注に「高橋虫麻呂」の名が記されていることから連想することは、この第二の「不尽の山（二）」の歌の作者は藤原宇合の付き人ではないかということです。高橋虫麻呂はその一人であることは明らかですが、彼の作は反歌の第二首目の歌ですから、長歌と第一反歌は異なった人が詠んだと考えるべきです。

蝦夷征討持節大將軍に任じられた藤原宇合が本項のキーマンですので、その関連した生涯の一部を振り返ってみます。

藤原宇合は若い時、すなわち靈龜二年（七一六）遣唐使（押使・多治比県守、大使・大伴山守）の副使として唐に派遣されています。その翌年養老に改元されますが、養老元年（七一九）三月に帰国しました。

それからしばらくして常陸守に任じられました。続日本紀にはこの叙任の記録はありませんが、養老三年（七一九）七月に常陸守として、安房国・上総国・下総国の三国を管掌する按察使に任じられたことが記されています。

このことから藤原宇合は遅くとも養老二年（七一九）には常陸守に任じられていたはずですが、高橋虫麻呂は万葉集から、藤原宇合の使人と想定されているので、藤原宇合の常陸守赴任に同行していたはずですが。

反歌第一首目の歌に六月十五日の日付が詠み込まれていますが、赴任時候と考えることは可能です。通常、一月に叙位の発表があり、二月以降に叙任が発表されますので、五月頃にずれ込み、相模湾を航行時期が六月になったことは想定範囲です。残念ながら、藤原宇合の常陸守叙任は続日本紀には記録されていませんので、確定はできません。

六月と雪とは季節はずれで、関係ないように思えますが、この時代は寒期でほとんど年中、富士山は雪の冠節が見られたのかもしれない。

更にこの推論を進めれば、第二の「不尽山の歌（二）」が「讃歌」あるいは「地理学的」と感じられるのは、予め調査されていたことと、この赴任の時の高揚感を持って詠まれたと考えることは想定可能です。常陸国は藤原家にとって重要な土地だったからです。

推定に従えば、第二の「不尽山の歌（二）」が時代的に古いので、通則からすれば、第二の「不尽の山（二）」、第一の「不尽の山（一）」の順に配列されるべきですが、ここでは逆転

していると考えられます。

配列順序は入手順によって変わることがあるので、これらの配列は万葉集の編集者の入手時期を考慮した方針に沿ったものと考えるべきです。

つまり、「不尽山の歌（二）」は山部赤人の二首の歌（「不尽山の歌（一）」と「山部宿禰赤人の伊予の温泉に至りて・・・」の歌の間に挿入された「不尽山の歌」と考だからです。

第二の「不尽山の歌（二）」の左注では、第二首目の反歌のみが高橋虫麻呂歌集の歌と記されていますので、長歌と第一首目の反歌一首は高橋虫麻呂よりも下位の人の作と考える方が合理的かもしれません。

山部赤人（巻三・四三一から四三三）と高橋虫麻呂（歌集）（巻九・一八〇七—一八〇八）は万葉集において、同じ歌題、すなわち上総国葛飾（今の市川市）に伝わる美少女、「真間の手古奈」のことを歌に詠んでいます。すなわちこれらの歌の題詞に記されているように、山部赤人も東国に行ったことが確かめられるので、二人には関係があつたことが想定されます。

高橋虫麻呂がそうであつたように、山部赤人も藤原宇合の使人であつたのではないかと想定しています。先に進みます。

この第二の「不尽山の歌（二）」に続いて、新たな船旅に関する山部赤人の歌が収録されています。この歌は、その題詞から伊予の温泉で作られた歌であることがわかります。この歌を「伊予の歌」と称すれば万葉集における配列が隣接していることから「不尽山の歌」と「伊予の歌」の関連を考えてみる必要があります。考察を進めていきます。

山部赤人のこれら二つの歌の関連性は続日本紀にある次の記事で説明できるのではないかと考えました。

続日本紀によれば「神亀二年閏正月、陸奥（みちのく）国の蝦夷（えみし）の捕虜百四十四人を伊予国に、五百七十八人を筑紫に、十五人を和泉監（いずみのげん）にそれぞれ配置した」（宇治谷孟著）と記録されています。

この記事の背景を更に追ってみると、この記事の約一年前の神亀元年（七二四）三月に蝦夷の反乱によって大掾（国守、介につぐ職階の役人）・従六位上の佐伯児屋麻呂が殺されるという事件が陸奥国から報告されています。そのために翌月の四月に式部卿・正四位上の藤原宇合を持節大將軍として、宮内大輔・従五位上の高橋安麻呂を副將軍に任じて蝦夷の征討軍が派遣されました。

少し人間関係に言及すれば、先述の高橋（連）虫麻呂はこの副將軍の高橋安麻呂の姓が朝臣ですので、同門出身ではありませんが、万葉集では大將軍の藤原宇合と使人のように東国派遣に従っていることは先述しました。その関係で、第二の「不尽山の歌（二）」が挿入されたことは、これらの歌がこの事件の関係者の歌と考えれば、万葉集編者の意図は納得がいきます。藤原宇合が常陸守として常陸国に赴く時と同じ航路を辿っていたのですから、捕虜護送に携わっていた役人の中に「不尽山の歌（二）」を思い出したのは納得がいくという意味です。

この事件は聖武天皇の即位から約二カ月後の神亀元年（七二四）三月に発生しました。即位年の三月に五日間の日程で吉野宮へも行幸されていますが、この時は事件は報告されて

いなかったようです。「神亀元年三月吉野行幸」と称しておきましょう。

同年十月、つまり反乱発生後、約半年後に紀伊国に行幸されました。約二十日間の日程でした。「神亀元年十月紀伊国行幸」と称しておきましょう。

この両行幸は万葉集にとっても重要な意味を持っています。即位後それぞれ初めての行幸ですから、万葉集には記念すべき歌が残されることになりました。

吉野宮への行幸は五日間でしたが、蝦夷の反乱は聖武天皇が吉野行幸から平城宮に還幸されてから二十日後に発生しました。紀伊国行幸は十月五日に出発されていますが、蝦夷の反乱はその時にはほぼ鎮圧されていたのででしょう。蝦夷反乱の最中の行幸とも一見考えられそうですが、陸奥国という当時遠方の地のことでですから問題ないと判断されたのでしょうか、それ以上に即位された聖武天皇には新都建設（難波京）の夢があったことが紀伊国行幸を敢行されたと思定しています。

後の話ですが天平十二年九月に、筑紫で藤原広嗣が反乱を起した時も聖武天皇は伊勢行幸を敢行されました。この時の反乱は蝦夷反乱とは比較できないほど大規模でしたし、朝廷の要諦の地、大宰府も陥落の可能性があったのですが、やはり新都建設（この時は恭仁京）の思いが強かったことが続日本紀から想定されます。この伊勢行幸には二十三歳の大伴家持が内舍人として従駕し、その時の歌が万葉集に収録されています。

即位されたばかりの聖武天皇にとって紀伊行幸は重要な決断、成就請願の機会だったのです。続日本紀によれば、神亀元年四月に藤原宇合が持節大將軍、高橋安麻呂が副將軍に任じられ、同年十一月には「近江国に駐屯する持節大將軍の藤原宇合を慰問するために内舍人を派遣した」ことも記録されていますので、短期間にこの事件は平定されたことになります。

そして翌年の神亀二年閏正月に「捕虜を伊予国と筑紫それに和泉監に護送すること」が続日本紀に記録されました。そして同月に聖武天皇はみずから藤原宇合以下、千六百九十六人に地位や功勞に応じて勲位を授けられています。そして大將軍の藤原宇合は正四位上から従三位・勲二等が、副將軍の高橋安麻呂は従五位上から正五位下・勲五等を賜っています。

山部赤人が第一の「不尽山の歌（一）」（巻三・三二八）と「伊予の歌」（巻三・三二三）とをほぼ同じ時系列的に詠んだことからこの二つの歌はこの蝦夷反乱事件に関わったと考えるのが合理的ではないかと考えました。

この考えに沿って山部赤人の立場から話を進めてみましょう。

興味あることは山部赤人は「神亀元年十月紀伊行幸」にも従駕していることです。

山部赤人の歌（巻六・九一七、九一八、九一九、後述）の題詞から時期も明らかです。従って神亀一年から二年にかけての山部赤人の行動は紀伊国行幸従駕―陸奥方面への捕虜引き取り―伊予国への護送を説明できることが必要です。

まず考えられるのはすべて軍船で移動したということでしょう。まず軍船に乗って聖武天皇の紀伊行幸に従駕します。行幸の護衛でしょう。

この時の行幸では、聖武天皇は神亀元（七二四）年十月（二十五日）に還幸されているので、陸奥国の捕虜を護送するために派遣されたのは神亀元年十一月の初旬と推定します。「田児の浦」に寄港するのは陸奥国に行く時か、あるいは帰る時かは不明ですが季節的には冬あるいは初春まで可能性があります。「不尽山の歌」の中で「雪は降りける」と詠んだ季節感に

対応します。反乱が鎮圧されて捕虜を護送する途中で、寄港した今の田子の浦を船出して、しばらくして「不尽山の歌（一）」は詠まれたと考えました。そうすれば神亀元年十二月末から二年一月ということも考えられます。

想定ではこの間二ヶ月かかっていますが可能な行程のように考えます。

そして神亀二年一月末に難波津に帰還したのです。神亀二年正月には続日本紀によれば一月と閏一月が二ヶ月あったことになりましたが、伊予国への護送を閏正月（四日）と考えれば合理的な行程のように考えられます。

事実、続日本紀には神亀二年閏正月（四日）に「捕虜を伊予国、筑紫および和泉監にそれぞれ配置した」と完了形のように記録されていますが、護送軍船の出港と考えても良いのではないのでしょうか。

「伊予の歌」（巻二・二二二、二二三）を掲げます。

やまへのすくねあかひと
山部宿禰赤人の伊予の温泉に至りて作れる歌一首并せて短歌

▼皇神祖の神の命の敷きいます 国のごこと湯はしも多にあれども 島山の宜しき

国とごしき 伊予の高嶺の 射狭庭の 岡に立たして うち思ひ 辞思ひせし み湯の上の

樹群を見れば 臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変らず 遠き代に 神さびゆかむ

行幸処

反歌

▼もしきの 大宮人の 飽田津に 船乗りしけむ 年の知らなく

この山部赤人の歌を陸奥国の捕虜を護送して伊予に来た時の歌と想定しました。想定が正しければ時はこの歌が詠まれた時期は神亀二年閏一月中あるいは遅くとも二月ということになります。山部赤人は伊予国護送（続日本紀によれば捕虜百四十四人）を担当したことになります。筑紫には捕虜五百七十八人を護送しますが、これは他の部隊の役目だったでしょう。この歌も捕虜護送のことは一切詠み込まれていません。

伊予温泉には歴代の天皇が行幸されていますが、そのことは詠みこまれています。

捕虜を収容した後の安堵した雰囲気を感じられるだけです。この反歌から山部赤人は額田王の歌（巻一・九）を知っていたでしょう。参考までに額田王の歌を掲げます。

額田王の歌

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

「伊予の歌」の反歌から、山部赤人は、この額田王の歌を知った上で詠んだはずです。

「伊予の歌」が詠まれた背景は以下のように考えられます。神亀二年一月に難波津に帰港、そして閏一月（続日本紀）に伊予に向けて出港、それから一カ月も経たないある日、捕虜が収監されてほっとした時に「伊予の歌」が詠まれたと考えています。

これまでの話を整理して合理性を確認します。

- (一) 神亀元年（七二四）三月、陸奥国の蝦夷の反乱によって大掾（国守、介につぐ職階の役人）・従六位上の佐伯児屋麻呂が殺害される（続日本紀）。
- (二) 同年四月、藤原宇合が大將軍として征討のため派遣される（続日本紀）。
- (三) 同年十一月、近江国（帰京中）に滞在していた藤原宇合を慰問のため勅使（内舎人）を派遣（続日本紀）。
- (四) 山部赤人、第一の「不尽山の歌（一）」を詠む（詠まれた時期は捕虜護送中と推定し、神亀元年十二月から翌年一月までの期間と推定）。
- (五) 同二年一月までに難波津に帰港（推定）
- (六) 同二年閏一月に捕虜を伊予国と筑紫それに和泉監に護送（続日本紀）。
- (七) 同二年閏一月に藤原宇合以下関係者の聖武天皇自ら叙勲（続日本紀）
- (八) 同二年二月頃に山部赤人「伊予の歌」を詠む。

注）叙勲の時期と山部赤人が「伊予の歌」を詠んだ時期は閏一月の誤記の可能性があり、考察は必要。それは山部赤人も臨んだ場で叙勲が行われたとすれば、(七)と(八)の順位は逆転する可能性がある。

参考資料、難波津から伊豆あるいは伊予への航路日程はいずれも約二週間、

総括

概略として、山部赤人の「不尽山の歌」と「伊予の歌」を一連の歌と考え、そのことと続日本紀の記録に当てはめると右記のように納得いく想定ができたと考えています。

万葉集を面で考え、国史と可能な限り相関づけることによって歌の背景を蘇えさせることのできた事例と考えています。